芸術専門学群プログラム　評価委員　講評

評価委員
NPO法人つくばハウジング研究会理事長、筑波大学元副学長　冨江伸治
茨城県つくば美術館分館長　舟木力英

総　評

「食と緑」と「美と芸術」というのはユニークな組み合わせだが、この二つは、いずれも人間生活に不可欠なものの象徴であり、食の安全や心豊かな国民生活を目指すわが国にとって、本プログラムは有意義であった。社会貢献活動と教育活動の融合など、本プログラムの目標は、一応達成されたと評価できる。ただし、マイスター育成講座と他のプログラム（公開講座、科目等履修など）との役割分担や整合性について検討が必要と思われる。市民受講生にとっては大学における高度な授業を経験できた一方、学生は、社会人に接することで視野が広がり、それぞれのジャンルでの社会における在り様について考える機会となり、自分が専門家になる教育を受けていることの意味や自己の立場についての認識を深めたと思われるなど、本プログラムならではの学生への教育効果があったと思われる。

参加した市民に対して

各市民受講生にとって、本プログラムは、それぞれ有意義であったことがわかり、本プログラムの継続を願う受講生が多かったように見受けられる。芸術支援部門のアートライティングや石井コレクションでのギャラリートークの発表は、学校や美術館との連携強化の可能性を示唆したが、地域での指導的役割を担う市民を募り、それにあったプログラムの構成にさらなる工夫が必要と思われる。

参加した学生に対して

学生は、世代の違う市民受講生が学内に入ってくることにより、最初は戸惑いを覚えたが、やがて刺激となり、あらためて大学で学ぶ自己の姿勢について考える貴重な経験をした。市民受講者に教えるのみならず、お世話役を果たすことで学ぶことも多くあったと思われる。

大学への期待について

つくば市と筑波大学との連携協定がなされ、それにもとづいてさまざまな地域貢献活動が行われているが、さらに充実させてほしい。今回の現代GPプログラムのように新しい試行を重ね、時代にあった生涯学習教育プログラムの開発等を積極的に進めることを期待したい。大学の地域連携については市民への周知が大切であり、広報にも一層力を入れてほしい。今後、大学（院）で社会人の増加が予想される状況にあって、本プログラムからは多くの示唆が得られたと思われるので、その成果を各教育組織のプログラム改善等に活かしてほしい。知的関心が強く要求の多い市民受講生に対し、教員には負担と苦労があったようだが、つくば地域に多く存在する研究者など学外の人材を公募するなどして活用するという方法も検討すべきではないか。